

JAAS 年次大会における研究能力強化セッションの試み

京都大学 関口 倫紀

1. 企画に至った経緯

第20回 JAAS 年次大会の共同大会運営委員長を拝命した際にぜひ実現させたいと思った企画の1つが、学会員の研究能力の向上を目的とした「研究能力強化セッション」であった。

ご存知のとおり、JAAS 年次大会の発表種目の中には公開レクチャーというものがあり、これまでの年次大会でも、特定の研究トピックや研究方法論などに関する単発の公開レクチャーが行われることはあった。しかし、より体系的なかたちで研究能力強化セッションを実施したのは、今回の年次大会が初めてではないかと思う。

私自身、これまで多くの海外学会などに参加した中で、いわゆる通常の論文発表セッションやシンポジウムなどの他で役立ったのが、複数の主要なジャーナルの編集長が次々と登壇し、自誌の編集方針、査読体制、求めている論文、良い論文と悪い論文の例などを解説してもらう編集長セッションや、研究を実際に行う際のリサーチデザインやデータ分析に関するチュート

リアルセッション、そして、実績のあるベテラン研究者がこれまでの体験談を語り若手の研究者にアドバイスをするような特別セッションなどである。これらは、私自身が研究計画の構想を練ったり、研究を実施したり、論文化して投稿していったりする際にとても役に立った。よって、同じようなものを日本の学会でもやってみたかったのである。

また、欧米、そして最近では他のアジア諸国と比べると、日本ではまだ経営行動科学分野の研究者の絶対数が少ないため、大学院などにおいて研究者を育成する方法も十分に標準化されておらず、指導教員によって大学院生の指導の仕方が異なるという現実があると思っている。どの研究者も研究手法の得意不得意、分野の好き嫌い、特定の研究スタイルなどを持っているため、研究者養成において指導教員による個別指導のみに頼っているのは、大学院生側から見れば身につく知識やスキルにばらつきが出てしまう。

さらに、大学院生に限らず、プロの研究者であっても、研究を推進していく際に、困ったと



きに質問できる人が見つからないとか、そもそも基本的なことがよく分っていないのではないかといったような悩みや、改めて研究の基本を学びたい、過去に学んだ内容を復習したい、研究の基本を自分自身の研究の推進のみならず、学生指導の参考にしたいなどのニーズも多いのではないかと思っていた。

上記のようなニーズを踏まえ、これまでの国際学術交流担当理事としての職務の一環として、海外ジャーナルへの投稿の方法のような話を国際学術交流ワークショップなどでやったことはあった。しかし、研究能力強化を目的とする複数のセッションを年次大会でまとめて実施すれば、会員にとっての利便性も増すのではないかと考えた。

そこで今回、第一線で活躍している学会員の先生に、90分の持ち時間はやや負担がかかるのではないかと心苦しい思いをしながらもセッション担当をお願いし、ご快諾をいただき実現に至った次第である。その結果、大会第1日目には、慶應義塾大学の林洋一郎先生および神戸大学の鈴木竜太先生による、研究を実践していく上での基本でもあるリサーチデザインおよび仮説モデルに関する内容を扱う2つのセッションが実現した。そして大会第2日目には、名古屋大学の犬塚篤先生および早稲田大学の竹内規彦先生が解説を務め、かつゲスト登壇者もお招きする形で、査読付き学術雑誌に論文を掲載させるために必要な知識やスキルを身に付けてもらうことを念頭に置いた、優れた研究の条件や論文の執筆方法を扱う2つのセッションが実現した。そして、大会プログラム冊子などを通じて、今後研究能力を高めていきたい若手研究者から、さらに研究能力に磨きをかけたいベテラン研究者、若手研究者を育成する立場にある先生方まで、幅広い方々の参加を呼びかけた。

2. 当日の様子

大会プログラム上、研究能力強化セッションの配置は、通常の研究発表セッションと並行す

る形ですべて同じ部屋で行い、かつ同時時間帯に研究能力開発セッションが重ならないようにしたため、大会2日間で1人の会員がすべての研究能力強化セッションに参加することも可能となるようにした。初めての試みでもあったことから、年次大会が始まるまで、各セッションにどれくらいの参加者が集まるのかの予測が困難であった。したがって、研究能力強化セッションにあまり参加者が集まらないケースも想定し、セッションをご担当する各先生には、参加者数が少ない場合には、少人数の大学院ゼミで指導をするようなイメージでセッションをお願いしたいというような話もした。

しかし、結果的にすべてのセッションにおいてほぼ満席状態となり、立ち見が出るセッションもあった。また、研究能力強化セッションはとても良かったという感想や、研究能力強化セッションがあったから、今回の年次大会に参加したというようなコメントも、口頭やメールなどを通して多くいただき、企画者としてうれしい限りであった。

3. 今後の期待

本年次大会での研究能力強化セッションが予想以上に盛況であったことを振り返って感じるのには、まず、当学会には優れた研究をしたいという情熱をもった会員が、研究者、実務家、大学院生などを問わず、たくさんいることが分かったことであり、それと同時に、研究能力を向上させるためのセッションに対するニーズが強いのではないかということである。したがって、今後も、当学会でこのような試みが継続していくことを望む次第である。

今後、同様の企画を行っていく上で、今回の研究能力強化セッションで扱ったものに加え、以下のような内容も考えられるであろう。まず、より具体的なリサーチスキルの向上を目的とするものである。例えば、実験計画の立て方、質問紙の設計の仕方、質的研究におけるフィールドノートの書き方、統計ソフトの使い方、複

雑な統計分析手法などの解説というものが考えられる。

また、より双方向的なセッションとして、参加者が作成途中の論文原稿を持ち寄り、ワークショップ形式もしくは担当講師による個別面談方式で、論文を改善するためのフィードバックを行うセッションや、研究計画やデータの分析方法について個別の相談にのるクリニック形式のセッションなどがあると面白いと思う。

今回の趣旨とはやや外れるが、研究能力強化セッションに加え、教育能力強化セッションが

あってもよいと思う。例えば、経営行動科学分野における効果的な教育法のあり方や、教材の共同制作・共有などを進め、学会員が担当する授業や研修の効果性を高めるようなものがあると役立つのではないかと思う。

最後に、今回の年次大会で研究能力強化セッションをご担当いただいた先生方、ゲスト登壇者の方々、そしてセッションにご参加いただいた年次大会参加の会員の皆様に対し、この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。